

令和 2 年 7 月 10 日現在

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K03292

研究課題名(和文) ルソーのアソシエーション論から女性の能動化と戦争を阻止する国家の創出を探究する

研究課題名(英文) Will the Activation of Women Contribute to the Realization of a War-Free State?

研究代表者

鳴子 博子 (NARUKO, HIROKO)

中央大学・経済学部・教授

研究者番号：00586480

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：ルソーの政治構想は、従来、時にナショナリズムを準備するもの、国家の膨張を許す論理を内包するもの(近年の例ではベルナルディ)と捉えられてきた。こうした理解に反して、本研究は、ルソーの政治構想が国民国家の論理とは一線を画す、膨張しない「アソシエーション国家」の論理であることをフランス革命(内戦と諸外国との戦争を伴う)の分析を通して明らかにした。同時に本研究は、ルソーの性的差異論の視座から革命期の民衆の直接行動の分析を進めた。受動から能動へ転じたヴェルサイユ行進とそれ以降の女性たちは、ルソーの構想を超えており、公領域での働きかけは暴力を道徳の次元に転換させる道を開くものであることが明らかにされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

<ルソーの思想とフランス革命の関係>は語られることの多いテーマであるにもかかわらず、ルソー研究サイドからの探究は活発とは言えない現状にある。それゆえ、本研究はルソー固有の「革命概念」と「性的差異論」という2つの分析視座から、フランス革命を捉え直すとともに、ルソー理論の特質に新たな光を当てるという二重の学術的な意義を帯びている。近現代の国民国家の歴史は戦争の歴史であった。国民国家とは一線を画す、戦争をしない国家の論理を探究する本研究の有する社会的意義、現代的意義はきわめて大きい。

研究成果の概要(英文)：Rousseau's political concept has often been regarded as that preparing nationalism. In other words, allowing a nation to expand, as a recent example, Bernardi. This study opposes this understanding. Rousseau's political concept is the logic of a state as an association of its citizens that does not expand, apart from that of the nation state itself. This study proves this point through the analysis of the French Revolution which involved a civil war and wars with other monarchies and kingdoms. At the same time, this study advanced the analysis of the direct behavior of the people during the French Revolution from the viewpoint of Rousseau's theory of sexual difference. Women in the March on Versailles in 1789 and after that march, changed from passive to active. Their actions were beyond Rousseau's vision; and moreover, they had the potential to turn violent protests into morality.

研究分野：社会思想史・政治思想史・ジェンダー論

キーワード：ルソー フランス革命 女性の能動化 ヴェルサイユ行進 暴力 道徳

1. 研究開始当初の背景

研究開始の平成 27 年度は、ISIL(イスラム国)の勢力拡大が著しく、世界は暴力とテロの脅威に晒された緊迫した状況下にあった。

私たちの多くは国民国家の下で生きているが、国民国家はフランス革命を契機として生成、発展した歴史的な国家の一形態である。振り返れば、現在に至る国民国家の歴史は戦争の歴史であった。暴力とテロの脅威に覆われた状況の中で、改めて「国家」に焦点を当て、政治思想研究とジェンダー研究とを交差させつつ、戦争をしない国家の論理とは何か、暴力の次元から道徳の次元への転換はいかにして可能かという課題に挑戦することとなった。

2. 研究の目的

(1)研究の目的は、研究課題名「ルソーのアソシエーション論から女性の能動化と戦争を阻止する国家の創出を探究する」に集約されている。国民国家は近代の市民革命が実現させた代議制国家でもあるが、代議制を擁する国民国家は、しばしば領土を拡張する志向をもつ膨張する国家であった。こうした膨張する国家の論理と一線を画す、戦争をしない国家の論理を探究することが、第一に研究の目的と挙げられる。

(2)研究にはもう一つの目的がある。それは、第一の目的探究のために用いられる分析視座そのものの精緻化、あるいは刷新である。ここでいう分析視座とは、ルソーの国家構想(一般意志/革命概念) ルソーの性的差異論の二つを指すが、それらの視座そのものの精緻化、刷新は、ルソーの政治構想に新たな光を当てることにも繋がる。

3. 研究の方法

(1)本研究の二つの視座については、上掲の研究の目的ですでに述べたが、研究を始めるにあたり二つの仮説を立てた。一つ目の仮説は、ルソーがフランス革命以前の 18 世紀後半に提示した国家構想は、フランス革命以後の国民国家の論理を準備するどころか、それと一線を画す、膨張しない(場合によっては縮小・分割することさえある)国家構想ではないか、である。

(2)戦争を阻止し暴力の次元を転換させる論理の探究には、これまでの社会科学の殻を破るような新たな視点、視座が求められる。もう一つの仮説は、女性が受動から脱して能動化し、女性の公的領域への参画が、戦争をしない国家の生成には不可欠である、であった。

4. 研究成果

(1) 雑誌論文「<暴力-国家-女性>とルソーのアソシエーション論」

人類は有史以来、数限りなく戦争を繰り返し、戦争を止めることができないでいる。どうすれば、戦争をする国家を戦争をしない国家に転換できるのだろうか。男性の能動性、攻撃性 その最たるものが兵士としての貢献が、古典古代以来、共和制における市民の平等な権利獲得の要件とされてきた。しかしこのような男性型の共和制原理の呪縛は断ち切られる必要がある。女性の攻撃性の乏しさ、受動性は肯定的な価値である。本稿は女性の受動性が新しい能動性の源泉となり、この女性の能動性が戦争をしない国家を出現させる、という仮説を立てる。その上で、ルソーの性的差異論を批判的に摂取し、それを換骨奪胎して新たな男女の能動-受動論を展開した。

(2) 雑誌論文「ルソーの一般意志と意志の定点観測 フランス革命、フィヒテ、ルナン、第三帝国」

本稿は仮説<代議制こそが独裁制を生む>を立て、ルソーの一般意志を分析視座として、第一(1794 年「最高存在の祭典」)、第二(1807-08 年「ドイツ国民に告ぐ」)、第三(1882 年「国民とは何か」)、第四(1934 年「ニュルンベルク・ナチ党大会」)の四定点の意志の変容を分析した。現代の奴隷意志は突然出現したのではなく、国民国家の代議制が国民の受動性を、「同意」や「承認」といった形で繰り返し育み、強めてきた結果、現れた。これが本稿の結論であり、仮説は確かめられた。

(3) 雑誌論文「ルソーのリプロダクション論と 18 世紀 授乳と戦争」

ルソーは「女性=授乳・男性=戦争」として両性の務めを対置させ、母の思想・理論を展開した。それは 18 世紀のフランス社会に対する危機感から生まれた変革理論であった。母が授乳せず、わが子を乳母に預ける当時の習俗と対決するセックス(絶対的性差)を基準とした 18 世紀版ジェンダー再構築論だったのである。

(4) 雑誌論文「ジェンダー視点から見たルソーの戦争論 ルソー型国家は膨張する国家なのか」

本稿は契約国家にさえ膨張する可能性ありとするブリュノ・ベルナルディ(近年のルソー研究の牽引者)に反駁する。ルソーの大小 2 つの祖国(ルソー型国家・家族)構想は、政治を戦争から道徳に転換させ、膨張しない国家を創設する構想である。ルソーは、批判者たちが説くような女性を劣位に置く家父長制国家論者、ブルジョア家族の擁護者ではないのである。

(5) 雑誌論文「ルソーの革命とフランス革命 暴力と道徳の関係をめぐって」

1789年の民衆の直接行動であるバスチーユ攻撃とヴェルサイユ行進とをルソーの革命概念と性的差異論という独自の視座から対比し、暴力の質の違いを明らかにするとともに、94年の最高存在の祭典に、力の次元から道徳の次元への転化を読み取る。ルソーの革命概念の核心に迫るとともに暴力とジェンダーの関係を浮かび上がらせる。

(6)「ルソー的視座から見た1792年8月10日の革命 国王の拒否権と民衆の直接行動をめぐって」(中島康子編著『暴力・国家・ジェンダー』中央大学社会科学研究所研究叢書39、中央大学出版部、第1章所収)

国王の拒否権行使が民衆との力の衝突を生み、民衆の8月10日の直接行動が王政を倒した。本稿は『社会契約論』の革命観(輓の振りほどき)から8月10日の革命(第二革命)を捉え直す。革命主体は「連盟兵とパリの民衆」であり、8月10日の革命は「92年7月14日」の人々の意志と力の帰結であるが、戦争状態は終わっていないと結論づける。

(7)「ルソーの『ポーランド統治論』から見たヨーロッパ政治秩序 ポーランドとフランスの拒否権を対比して」(新原道信・宮野勝・鳴子博子編著『地球社会の複合的諸問題への応答の試み』中央大学学術シンポジウム研究叢書12、中央大学出版部、第8章所収)

本稿は政治的無秩序の原因とされ、廃止されるべきものと見なされたポーランドの自由拒否権をなぜルソーは条件付きとはいえ肯定するのかという疑問から出発する。領土拡張のためポーランド分割を狙う列強に抗して、どうしたらポーランドを存続させうるのか、ルソーはその難問に再編パトリ連合構想で答える。それは、ポーランドが自主的に国土を縮小・分割して出現する再編パトリを単位として、再編パトリが独立したままで連合を組む国家連合構想であった。議論は現代のブレグジットに移る。ルソーによって提起されたこのパトリオティズム構想は、EUが新しい統合の在り方を模索するための有益な示唆を与えるものであった。

(8)「ルソー的視座から見た時間・空間のジェンダー「フランス革命」論 戦争状態を終わらせるものは何か」(鳴子博子編著『ジェンダー・暴力・権力 水平関係から水平・垂直関係へ』晃洋書房、第1章所収)

本稿は、(5)「ルソーの革命とフランス革命 暴力と道徳の関係をめぐって」の分析視座であるルソーの革命概念と性的差異論を用いて、国王の権力と民衆の暴力とが剥き出しの力として対峙するフランス革命期を分析する。ヴェルサイユ行進は、民衆の女性たちが家族という近接領域から公共空間に現れ出て、国王に直談判してパリへの強制的な遷都と8月の諸法令と人権宣言の裁可とを実現させた。ヴェルサイユ行進とヴェルサイユ行進の影響圏の中で進行するロラン夫人の闘い、第二革命、最高存在の祭典へと分析は進む。第二革命によって、王権という輓は振りほどけたが、なお、革命期を生きる人々は自身の内なる奴隷性を振りほどくには至っていない。戦争状態を終わらせるもの、革命という暴力を道徳の次元に転換させるものとは、パリのみならず全土の女性たちが男性とともに公的空間に登場し市民宗教を受容することだった、これが本稿の結論である。

ところで、本研究はこれまで述べてきたように、研究代表者である鳴子の限定性の強い課題の個人研究を進めるものであった。しかし本研究は、当初から複数の研究協力者を募って、ジェンダーや暴力に重点を置いた共同研究を併行して進め、それとの連動、連携によって個人研究の進展を図る意図も有していた。実際に共同研究が動き出したのは、第27回中央大学学術シンポジウムの「理論研究」チームが主催した「ジェンダー・暴力・デモクラシー」(中央大学駿河台記念館、2018年2月3日)の開催された2018年以降である。(8)の収められた『ジェンダー・暴力・権力 水平関係から水平・垂直関係へ』は、その後、中央大学社会科学研究所の枠組みを離れ、研究協力者は4名から8名となり、総勢9名の執筆者による成果として刊行された。本書が分析対象とする時期は18世紀後半から現代までであり、執筆者はそれぞれ固有のテーマから共通テーマ「ジェンダー・暴力・権力」に切り込んでいる。公領域からであれ、近接領域・私領域からであれ、暴力と権力の関係を根源に遡って捉え、未来に向けてヒト-ヒト間の水平・垂直関係を展望する理論的挑戦に他ならない。以下に、本書の目次を付記する。

鳴子博子編著『ジェンダー・暴力・権力 水平関係から水平・垂直関係へ』
晃洋書房、2020年

第 部 革命・反乱・亡命

- 第1章 ルソー的視座から見た時間・空間のジェンダー「フランス革命」論
戦争状態を終わらせるものは何か (鳴子博子)
- 第2章 ナポレオンと植民地 反乱、奴隷、女性 (平野千果子)
- 第3章 19世紀亡命ロシア人社会における「むすびつき」 (大矢 温)

第 部 国策移民・労務政策・女性の自由

- 第4章 移民史研究におけるジェンダー
南方国策移民を軸にして (大久保由理)
- 第5章 戦時期の女性労務動員が現代日本に残したもの
「生理休暇」に焦点を当てて (堀川祐里)

第6章 アイルランド共和主義と女性 (後藤浩子)

第 部 世代関係・自己所有・「食」の問題

第7章 権力関係の起源としての世代 (棚沢直子)

第8章 フェミニズムと自己所有 (原千砂子)

第9章 現代日本の「食」の問題とジェンダー (河上睦子)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 鳴子博子	4. 巻 5
2. 論文標題 ルソーの革命とフランス革命 暴力と道徳の関係をめぐって	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 nyx	6. 最初と最後の頁 234-247
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 鳴子博子	4. 巻 50
2. 論文標題 フランス革命における暴力とジェンダー バスチーユ攻撃とヴェルサイユ行進を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中央大学経済研究所年報	6. 最初と最後の頁 385-405
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 鳴子博子	4. 巻 57-5・6
2. 論文標題 「ルソーのリプロダクション論と18世紀 授乳と戦争」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『経済学論纂』（中央大学）	6. 最初と最後の頁 285-302
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 鳴子博子	4. 巻 124-1・2
2. 論文標題 「ジェンダー視点から見たルソーの戦争論 ルソー型国家は膨張する国家なのか」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『法学新報』	6. 最初と最後の頁 357-386
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鳴子博子	4. 巻 32
2. 論文標題 戦争と女性 ルソーの差異論-国家論の再検討を通して	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 女性空間	6. 最初と最後の頁 115-124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鳴子博子	4. 巻 46
2. 論文標題 <暴力-国家-女性> とルソーのアソシアシオン論	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 中央大学経済研究所年報	6. 最初と最後の頁 337-357
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鳴子博子	4. 巻 56-5・6
2. 論文標題 ルソーの一般意志と意志の定点観測 フランス革命、フィヒテ、ルナン、第三帝国	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 経済学論纂(中央大学)	6. 最初と最後の頁 31-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計4件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 鳴子博子
2. 発表標題 ルソーの『ポーランド統治論』から見たヨーロッパ政治秩序 ポーランドとフランスの拒否権を対比して
3. 学会等名 第27回中央大学学術シンポジウム「地球社会の複合的諸問題への応答」中央大学社会科学研究所
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鳴子博子
2. 発表標題 ジェンダー視点から見たフランス革命 暴力と道徳の関係をめぐって
3. 学会等名 中央大学社会科学研究所シンポジウム, 第27回中央大学学術シンポジウム「理論研究」チーム主催
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鳴子博子
2. 発表標題 「ルソーのリプロダクション論と18世紀 授乳と戦争」
3. 学会等名 社会思想史学会第41回大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 中島 康予	4. 発行年 2019年
2. 出版社 中央大学出版部	5. 総ページ数 212
3. 書名 暴力・国家・ジェンダー	

1. 著者名 新原 道信、宮野 勝、鳴子 博子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 中央大学出版部	5. 総ページ数 444
3. 書名 地球社会の複合的諸問題への応答の試み	

1. 著者名 鳴子 博子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 212
3. 書名 ジェンダー・暴力・権力 水平関係から水平・垂直関係へ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>中央大学大学研究者データベース/研究者プロフィール https://ir.c.chuo-u.ac.jp/researcher/profile/00015450.html?lang=ja 地球社会の複合的諸問題への応答の試み http://www2.chuo-u.ac.jp/up/isbn/ISBN978-4-8057-6192-2.html 経済学部教授鳴子博子の編著『ジェンダー・暴力・権力 水平関係から水平・垂直関係へ』が刊行されました https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2020/03/48181/</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	平野 千果子 (HIRANO CHIKAKO)		
研究協力者	大矢 温 (OOYA ON)		
研究協力者	大久保 由理 (OOKUBO YURI)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	堀川 祐里 (HORIKAWA YUURI)		
研究協力者	後藤 浩子 (GOTOU HIROKO)		
研究協力者	棚沢 直子 (TANASAWA NAOKO)		
研究協力者	原 千砂子 (HARA CHISAKO)		
研究協力者	河上 睦子 (KAWAKAMI MUTUKO)		